

§6. ベクトル場

ここでは、ベクトル場というベクトル値関数について述べておこう。

定義 6.1 D を \mathbf{R}^n の部分集合とする. D で定義された \mathbf{R}^n に値をとるベクトル値関数を D 上の n 次元ベクトル場という.

ベクトル場があたえられているとは各点に対してその点を始点とするベクトルがあたえられていることと理解することができる. また, ベクトル場に対して, \mathbf{R}^n の部分集合で定義されたスカラー値関数をスカラー場ともいう.

まず, 力学からの例を挙げよう.

例 6.1 (運動方程式) 点 $x \in \mathbf{R}^3$ における単位質量の受ける力が $F(x)$ と表されるとする. このとき, 時刻 t における質量 m の質点の位置を $\gamma(t)$ とおくと, 運動方程式

$$m\gamma''(t) = F(\gamma(t))$$

がなりたつ. 上に現れた F は \mathbf{R}^3 あるいはその部分集合で定義された \mathbf{R}^3 に値をとるベクトル値関数であるから, F は 3 次元ベクトル場である.

スカラー場から勾配というベクトル場を定めることができる.

例 6.2 (勾配) D を \mathbf{R}^n の開集合, f を D 上の C^1 級のスカラー場とする. このとき, D 上の連続な n 次元ベクトル場 $\text{grad } f$ を

$$\text{grad } f = \left(\frac{\partial f}{\partial x_1}, \frac{\partial f}{\partial x_2}, \dots, \frac{\partial f}{\partial x_n} \right)$$

により定める. $\text{grad } f$ を f の勾配という. $\text{grad } f$ を ∇f と表すこともある.

問 6.1 ∇ の読みを答えよ. (ベクトル解析や電磁気学の教科書を調べよ.)

例 6.2 とは逆に, ベクトル場から発散というスカラー場を定めることができる.

例 6.3 (発散) D を \mathbf{R}^n の開集合, F を D 上の C^1 級の n 次元ベクトル場とし, F を

$$F = (F_1, F_2, \dots, F_n)$$

と表しておく. このとき, D 上の連続なスカラー場 $\text{div } F$ を

$$\text{div } F = \sum_{i=1}^n \frac{\partial F_i}{\partial x_i}$$

により定める. $\text{div } F$ を F の発散という.

例 6.4 (Laplacian) D を \mathbf{R}^n の開集合, f を D 上の C^2 級のスカラー場とする. このとき, 例 6.2 と例 6.3 より,

$$\begin{aligned} \text{div}(\text{grad } f) &= \sum_{i=1}^n \frac{\partial}{\partial x_i} \frac{\partial f}{\partial x_i} \\ &= \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2 f}{\partial x_i^2}. \end{aligned}$$

ここで,

$$\Delta f = \sum_{i=1}^n \frac{\partial^2 f}{\partial x_i^2}$$

とおくと,

$$\operatorname{div}(\operatorname{grad} f) = \Delta f$$

と表すことができる. Δ を Laplace 作用素または Laplacian という. また, 偏微分方程式

$$\Delta f = 0$$

を Laplace 方程式といい, Laplace 方程式をみたす f は調和であるという.

Laplacian はベクトル場に対しても作用させることができる. 実際, ベクトル場の各成分に対して Laplacian を作用させればよい. すなわち,

$$F = (F_1, F_2, \dots, F_n)$$

と表される D 上の C^2 級の n 次元ベクトル場 F に対して,

$$\Delta F = (\Delta F_1, \Delta F_2, \dots, \Delta F_n)$$

とおけばよい.

問 6.2 $a, b, c, d, e \in \mathbf{R}$ とし, \mathbf{R}^2 上のスカラー場 f を

$$f(x, y) = ax^2 + 2bxy - ay^2 + cx + dy + e \quad ((x, y) \in \mathbf{R}^2)$$

により定める. f は調和であることを示せ. (Laplace 方程式を確かめる.)

問 6.3 原点を含まない \mathbf{R}^2 の開集合上の C^2 級のスカラー場 $z = f(x, y)$ と極座標変換

$$x = r \cos \theta, \quad y = r \sin \theta$$

の合成を考える.

(1) 等式

$$\Delta z = \frac{\partial^2 z}{\partial r^2} + \frac{1}{r} \frac{\partial z}{\partial r} + \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2 z}{\partial \theta^2}$$

がなりたつことを示せ. (合成関数の微分法を用いる.)

(2) $\mathbf{R}^2 \setminus \{0\}$ 上のスカラー場

$$z = \frac{x}{x^2 + y^2}$$

は調和であることを示せ. ((1) を用いる.)

問 6.4 正則関数は何回でも微分可能であることが分かる.

f を \mathbf{C} の開集合 D で正則な複素関数とする. このとき, $z \in D$ および f を

$$z = x + iy, \quad f = u + iv$$

と実部と虚部に分けておき, u, v を 2 変数 x, y の実数値関数とみなす. 上の事実を用いることにより, u, v はともに調和であることを示せ. (更に, Cauchy-Riemann の関係式も用いる.)

2次元および3次元のベクトル場に対しては, それぞれ回転というスカラー場およびベクトル場を定めることができる.

例 6.5 (回転) まず, D を \mathbf{R}^2 の開集合, F を D 上の C^1 級の 2次元ベクトル場とし, F を

$$F = (F_1, F_2)$$

と表しておく. このとき, D 上の連続なスカラー場 $\text{rot } F$ を

$$\text{rot } F = \frac{\partial F_2}{\partial x_1} - \frac{\partial F_1}{\partial x_2}$$

により定める. $\text{rot } F$ を F の回転という.

また, D を \mathbf{R}^3 の開集合, F を D 上の C^1 級の 3次元ベクトル場とし, F を

$$F = (F_1, F_2, F_3)$$

と表しておく. このとき, D 上の連続な 3次元ベクトル場 $\text{rot } F$ を

$$\text{rot } F = \left(\frac{\partial F_3}{\partial x_2} - \frac{\partial F_2}{\partial x_3}, \frac{\partial F_1}{\partial x_3} - \frac{\partial F_3}{\partial x_1}, \frac{\partial F_2}{\partial x_1} - \frac{\partial F_1}{\partial x_2} \right)$$

により定める.

$\text{rot } F$ を $\text{curl } F$ と表すこともある.

電磁気学から発散と回転の現れる例を挙げよう.

例 6.6 (Maxwell の方程式) 電磁気学の基本方程式である Maxwell の方程式とは 4 つの方程式

$$\begin{cases} \text{div } E = \frac{\rho}{\varepsilon_0}, \\ \text{rot } E = -\frac{\partial B}{\partial t}, \\ \text{div } B = 0, \\ c^2 \text{rot } B = \frac{j}{\varepsilon_0} + \frac{\partial E}{\partial t} \end{cases}$$

である. ただし, E は電場, B は磁場, ρ は電荷密度, j は電流, c は光速, ε_0 は誘電率, t は時間を表す.

勾配, 発散, 回転に関する公式は数多くあるが, 幾つか挙げておこう.

定理 6.1 $n = 2, 3$ とし, D を \mathbf{R}^n の開集合, f を D 上の C^2 級のスカラー場, F を D 上の C^2 級の n 次元ベクトル場とする. このとき, 次の (1)~(3) がなりたつ.

- (1) $\text{rot}(\text{grad } f) = 0$.
- (2) $n = 3$ のとき, $\text{div}(\text{rot } F) = 0$.
- (3) $n = 3$ のとき, $\text{rot}(\text{rot } F) = \text{grad}(\text{div } F) - \Delta F$.

証明 (1): $n = 3$ の場合のみ示す.

偏微分の順序が交換可能であることを用いると,

$$\begin{aligned} \text{rot}(\text{grad } f) &= \text{rot} \left(\frac{\partial f}{\partial x_1}, \frac{\partial f}{\partial x_2}, \frac{\partial f}{\partial x_3} \right) \\ &= \left(\frac{\partial^2 f}{\partial x_2 \partial x_3} - \frac{\partial^2 f}{\partial x_3 \partial x_2}, \frac{\partial^2 f}{\partial x_3 \partial x_1} - \frac{\partial^2 f}{\partial x_1 \partial x_3}, \frac{\partial^2 f}{\partial x_1 \partial x_2} - \frac{\partial^2 f}{\partial x_2 \partial x_1} \right) \\ &= 0. \end{aligned}$$

(2): F を

$$F = (F_1, F_2, F_3)$$

と表しておき、偏微分の順序が交換可能であることを用いると、

$$\begin{aligned} \operatorname{div}(\operatorname{rot} F) &= \operatorname{div} \left(\frac{\partial F_3}{\partial x_2} - \frac{\partial F_2}{\partial x_3}, \frac{\partial F_1}{\partial x_3} - \frac{\partial F_3}{\partial x_1}, \frac{\partial F_2}{\partial x_1} - \frac{\partial F_1}{\partial x_2} \right) \\ &= \frac{\partial}{\partial x_1} \left(\frac{\partial F_3}{\partial x_2} - \frac{\partial F_2}{\partial x_3} \right) + \frac{\partial}{\partial x_2} \left(\frac{\partial F_1}{\partial x_3} - \frac{\partial F_3}{\partial x_1} \right) + \frac{\partial}{\partial x_3} \left(\frac{\partial F_2}{\partial x_1} - \frac{\partial F_1}{\partial x_2} \right) \\ &= 0. \end{aligned}$$

(3): F を (2) の証明と同様に表しておくと、両辺の第 1 成分は等しく

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial x_2} \left(\frac{\partial F_2}{\partial x_1} - \frac{\partial F_1}{\partial x_2} \right) - \frac{\partial}{\partial x_3} \left(\frac{\partial F_1}{\partial x_3} - \frac{\partial F_3}{\partial x_1} \right) &= \frac{\partial}{\partial x_1} \left(\frac{\partial F_1}{\partial x_1} + \frac{\partial F_2}{\partial x_2} + \frac{\partial F_3}{\partial x_3} \right) \\ &\quad - \left(\frac{\partial^2 F_1}{\partial x_1^2} + \frac{\partial^2 F_1}{\partial x_2^2} + \frac{\partial^2 F_1}{\partial x_3^2} \right) \\ &= \frac{\partial^2 F_2}{\partial x_1 \partial x_2} - \frac{\partial^2 F_1}{\partial x_2^2} - \frac{\partial^2 F_1}{\partial x_3^2} + \frac{\partial^2 F_3}{\partial x_1 \partial x_3}. \end{aligned}$$

その他の成分についても同様である。 □

問 6.5 真空中における Maxwell の方程式は

$$\begin{cases} \operatorname{div} E = 0, \\ \operatorname{rot} E = -\frac{\partial B}{\partial t}, \\ \operatorname{div} B = 0, \\ c^2 \operatorname{rot} B = \frac{\partial E}{\partial t} \end{cases}$$

と表すことができる。 E, B が C^2 級ならば、 E, B の各成分は偏微分方程式

$$\frac{\partial^2 f}{\partial t^2} = c^2 \Delta f$$

をみたすことを示せ。なお、上の偏微分方程式を波動方程式という。(定理 6.1 の (3) を用いる.)

問 6.6 F, f をそれぞれ \mathbf{R}^3 の開集合 D 上の C^1 級の 3 次元ベクトル場、スカラー場とする。

(1) 等式

$$\operatorname{rot}(fF) = \operatorname{grad} f \times F + f \operatorname{rot} F$$

がなりたつことを示せ。(直接計算する.)

(2) f が D の任意の点で 0 とはならず、

$$\operatorname{rot}(fF) = 0$$

をみたすならば、

$$\langle F, \operatorname{rot} F \rangle = 0$$

がなりたつことを示せ。((1) を用いる.)

(3) f が C^2 級るとき、

$$\operatorname{rot}(f \operatorname{grad} f) = 0$$

がなりたつことを示せ。((1) を用いる.)